

広島県立
府中高等学校
同窓会東京支部
会報 第14号

令和2年 高校と府中の街



昭和28年 高校と府中の街



FUCHU



来年（令和3年）の東京支部 総会・懇親会も中止します。

年初からの新型コロナウイルスの為、本年5月に予定していた支部総会・懇親会は中止とさせていただきます。一方、来年令和3年の支部総会・懇親会については、その開催に向け、役員及び幹事、委員で様々な可能性を検討いたしましたが、現時点では、ワクチンや特効薬の全国民への安定的な供給がまだ見えていないため、まことに残念ながら、総会・懇親会の開催を2年連続で見送らざるを得ない、との苦渋の決断を致しました。30年以上も続いている総会・懇親会を楽しみにしてくださっていた皆さまには大変申し訳ありません。一日も早く安全・安心で気兼ねなくご参加いただける日が来ることを、役員、幹事一同祈っておりますので、どうかお身体第一にお過ごしください。

今回の支部会報は、近況に加え、高校時代の思い出について多くの寄稿がありましたので、いつもより多い全16ページでお届け致します。また、本年の総会での報告する予定でありました令和元年度の収支報告書と活動報告も同封させていただきましたので、何卒よろしくお願い致します。

通信連絡賛助金 寄付者一覧

令和元年11月から令和2年8月31日迄（卒年順・順不同・敬称略）

東京支部では、支部会報の印刷・発送費用をこの「通信連絡賛助金」によって賄っております。今年度は総会・懇親会が中止になり、当日参加の皆さまからの通信連絡賛助金がありませんでした。来年度も総会・懇親会はございませんが、支部会報は継続発行しますので、同封の振込用紙にてお一人でも多くのご協力をお願い致します。

17年卒 横藤田 正	重田 弘毅	40年卒 植岡 宏三	津田 雅子	51年卒 金子 由紀子 (馬場)	小林 香寿美 徳永 智士 比羅岡 亮
20年卒 和田 祐一	32年卒 紀本 直幸 松本 雅子 (小川)	上村 正 鴨田 幸信 木村 茂治 高島 明子 (山崎)	47年卒 影山 修一 蔵本 栄 鈴木 瑞恵 (藤井)	中山 幹彦	61年卒 高橋 弘一郎
22年卒 大塚 欣二	33年卒 長谷川 晋朗	寺岡 暉人 薮本 達雄	原田 茂登美 森田 育宏 山上 明美 (中居)	52年卒 河原 雅彦 神谷 達也 高井 信子 (稲垣)	平成元年卒 中山 敦司
24年卒 松坂 隆之	34年卒 桑田 英樹	41年卒 棚橋 壽美 (橋本)	48年卒 東 千明 (小田)	藤井 一将 若松 孝文	平成11年卒 寺川 光洋 藤本 裕二
25年卒 道田 懐蔵	35年卒 小川 英光 金平 洋子 (武田)	宮本 武則 萩原 洋子 (木下)	藤原 和子 (青山)	53年卒 小川 由美子 (柿本)	平成27年卒 檀浦 歩
27年卒 助迫 邦利 仁科 和雄	唐川 安弘 東田 喜輔	42年卒 木原 政子 原 美知子 (名和)	49年卒 石岡 義章 竹中 廣虎 藤原 和嘉 宮坂 初恵 (福地)	54年卒 坂口 昌美 澄川 雅子 (加茂)	
28年卒 鎌倉 照光 神田 庄二 桑田 弘也	36年卒 坂本 和子 末村 正義 門田 耕爾	44年卒 鈴木 律恵 宮崎 孝直 宮崎 千代子 (松坂)	目崎 一登 本宮 正暁 本宮 直子 (海野)	56年卒 藤井 康雄	
29年卒 森信 節子 佐藤 詔三 田中 忠夫	37年卒 朝野 睦子 (山中)	門田 博文	50年卒 小谷 明美 (杉原)	57年卒 石岡 裕子 (小川)	田邊 禎二
30年卒 中村 恵子 (土谷)	神谷 俊男 前川 雪子 (白井)	45年卒 香川 小枝子 (池田)	富永 博敏 藤木 睦 宮崎 賢二	58年卒 松葉 達憲	
能島 小枝子	38年卒 甲斐 弘己 千葉 美江子 (栗原)	46年卒 佐藤 信之		60年卒 尾間 えみ (三船)	
31年卒 小林 成喜					

同窓生近況・日々の暮らし あれこれ

29年卒 森信節子

ひょんなことから私がダイビングを始めたのは70歳の時である。父が亡くなり母が独りになってからも府中を動かたくないというので私たち兄弟姉妹は10年間府中に通った。

私が70歳の時に母が99歳で逝き少し時間ができた頃、通っていたフィットネスクラブに「スキューバダイビングライセンス取得の講習をします。」という掲示があった。

一寸海の中を覗いてみるのもいいかなという軽い気持ちで講習を受け初級のライセンスを取り、初めての海らしい海に潜ったのが、沖縄の座間味であった。

一緒にライセンスを取った60歳過ぎのおばあばかり5人がガイドに連れられて海に潜った。これが素晴らしく楽しかった。何年か後になって、この時のダイビングガイドとまた一緒に潜った時、「森信さんうまくなりましたね。あの初めての時、こんなへたっぴーを5人もつれて潜るのかと思って僕はとても緊張しました。」と話された。

あれから14年余り、現在500本あまり潜っているけれど、静かでゆったりと海の中の魚たちと戯れるのは癒しでもある。

ダイビングは元気でさえあれば何歳になっても出来る。フィリピンの海だったと思うが91歳の女性ダイバーに遭ったことがある。動物学者のようだったけれど私もそれまで潜ればいいなあと思ったものである。

32年卒 戸田 豊

先輩に聞く 挫折から学ぶ元プロ野球選手 黒田博樹（日本経済新聞 平成30年4月2日から）

その球歴はさぞ輝かしいと思いきや、高校・大学時代は苦労の連続だった。プロ入り後も、初めは決して順風ではなかったが、手の届く小さなゴールを常に設定し、それを達成する努力を惜しまなかった。その積み重ねが日米通算200勝という金字塔につながった。

大阪の上宮高校時代はやっと3年生でベンチ入りしたが3番手投手で公式戦で投げるレベルではなかったし、甲子園にも縁がなかった。専修大学時代のゴールは公式戦で投げるレベルの投手になること。チームで2本の指に入る事が目標になった。4年生でようやくつかんだエースの座。ここで始めてプロ野球を意識した。プロでもドラフト1位で入った沢崎投手に追い付くのを次の目標とした。転機は2004年のアテネ五輪。松坂大輔さんら他チームのエースと共に戦い刺激を受けた。後に松坂さんが大リーグに移籍し、始めて黒田さんも大リーグを意識するようになる。

米国に渡ったのは32歳の時。大リーグで結果を残す事。これが次の目標になった。結果を出すために、投手としての生き方を大きく変えた。三振を取るのをやめ、変化球で打たせてとる投手になった。複数年契約が珍しくない米国でもあえて単年契約を選び、自分にプレッシャーをかけ続けた。

今の状況が厳しくとも、思い通りでなくても、目の前の小さな目標を超えて行く努力を続ける。その積み重ねの先に成功が待っている。

黒田さんは、「18歳の頃、自分がヤンキーススタジアムの先発マウンドに立つなんて想像だにしなかった。若者の可能性は無限大」とエールを送る。

35年卒 唐川 安弘（関西支部 前幹事長）

一昨年末、突然襲われた二度目のがん告知、急遽全摘手術、手術後の抗がん剤治療、入退院の繰り返し、その後、生活を一変させた無我夢中の体力回復努力もままならない内に、年初よりの新型Virus, COVID-19のpandemicで生活行動を激変させられました。

昭和30年代の世の中、好不況の荒波に揉まれた日々に、のちに、我が身の働く化学分野を決定づけた社会現象がありました。それは産業界の生産現場における化学物質による「臭い」でした。後に産業現場における「臭い」は「悪臭」として、環境問題に拡大しました。

今もって、脳裏に残る最大の記憶は府中駅からの通学道路に沿った「Nゴム製品会社」の放つゴム加工工程で発生したあの「悪臭」でした。幸か不幸か、私の叔父さんはそのそばで、化粧品の販売をして苦労の末、発展しました。当時は街も住民も「その匂い」？はあたりまえで、皆が受け入れていました。さらに、今は廃れた備後絣をはじめとする繊維の染色会社、金属加工のプレス油や切削油、その洗浄工程からの独特の「臭い」は当時の繁栄の証でもありました。

その後、公害防止法や環境条例に応じて、変遷し、幸いにも、それら大半の会社は今も街に現存していることでしょう。

36年卒 菊岡 和俊

私も78歳を迎えた今、健康願望が益々強くなりました。が、最近年相応に「度忘れ」が多くなって来ました。今後、脳を使うことに関心を持ち、地区の囲碁同窓会に入り悪戦苦闘、頑張っています（囲碁4段の腕前ですが）又、脳のボケ防止にと毎日クラシックギターの練習に取り組んでいます。

す。最後に大好きなゴルフを続け80歳までに「エイジシュート」の達成を目指し頑張りたいと思います。その為に毎日、筋トレ、ウォーキング、素振りをして頑張っています。

今から振り返って見ますと府中の中学、高校で野球部に入り徹底的に鍛えたのが、全ての基本になっていると思います。感謝しています。

44年卒 掛江 実

「備後」の地名が春日部に

退職後の生活に何かをと思い、九州赴任中の「九州88ヶ所108霊場巡り」の関東版を！と「鎌倉13仏巡り」を平成30年6月下旬の暑中に発願、7月初旬13番札所成就院で結願。そして坂東33ヶ所に続き、令和2年（2020）は松尾芭蕉の「奥の細道」を辿ることとした。

1月に深川、2月に千住、次は草加、春日部の処、新型コロナウイルスにより中断後の4月頃、埼玉県東部に位置する人口23万人の春日部市内に、備後一里塚跡の碑、備後丸彫庚申塔、備後須賀稻荷神社と地名に春日部なのに「備後」が附されているのを知った。

備後須賀稻荷神社は、関東三社稻荷（王子・佐野・備後）の一つで、建暦元年（1211）領主春日部治部少輔が建立した当時はこの辺りまで海で、須賀の小島で不思議な光を放つ観音像が見つかった。弘法大師が唐から招来し備後国に安置した仏像が関東に移る際に難破して行方不明になっていたものとわかり、須賀の島に祀ったという。この仏像が備後から来たので地名も備後となった。仏像は勝林寺（元亀元年（1570））創建）に保管されている。

空海の帰朝は大同元（806）で、令制国68の一つとして備後国府が府中市元町に置かれ、跡地の一部は「備後国府跡」として、平成28年10月に国の史跡に指定されている。

備後国は、現在の福山市・尾道市・府中市・庄原市・三次市・三原市等で、縁起を読む限り空海帰朝前直後に創建された寺に安置された仏像が持ち出されたものと想定される。

5月初旬、失礼を顧みず、仏像が保管されている勝林寺の32世住職に電話、「教育委員会、新聞社、週刊誌等の取材があり文献やCDもある。十一面観音菩薩像がある。備後の関係者からの問い合わせは初めて。」とのことで、コロナ終息後に訪問することとしている。

元々の本尊安置場所は府中市や福山市に限定出来ないが、金龍寺は大同元年（806）建立で浄土宗、甘南備神社は和同元年（708）、南宮神社は大同2年（807）に国府の守護神として祀られ、福山市の素戔鳴神社（備後国一宮）は天武天皇の御宇（672-686）の創祀、備後一宮吉備津神社は大同元年（806）、草戸稻荷神社は大同2年（807）空海が開基、明王院は大同元年（806）空海の開基で木造の十一面観音菩薩、医王寺は天長3年（826）空海の創建とあり、何れの寺からかの判断は地元備後に任せるとしても、昔日を偲ぶ夢のある話と思う。

地元は「備後」を知ってるが、春日部住民は謂れを知る人少なく、ゲームでのビンゴで知るのみだろうから、国府の一つで石州街道等の要所「備後」を知って貰うべく、各地の国府跡巡りや備後祭りのイベントに勝林寺に安置されている仏像の遷座は難しいだろうが、一時帰参は備後府中の活気づけ！と思うは「人生70古来稀なり」の歳のせいかな。

45年卒 森嶋 節男

還暦も過ぎ来年は古稀をも迎えようとしている年齢でも、まだ元気で仕事もそれなりに頑張っています。静岡の奥さんを貰い毎日富士山を拝んで楽しく生活しています。

47年卒 藤木 利明

コロナの影響で、府中の実家に2か月滞在しています。

文書を書くのが苦手なので、差し支えなければ、府中市（府中高校を含む）の全景写真の過去と現在を添付します。（編集者：今号の表紙に掲載させていただきました）

49年卒 石岡 義章

大変な世の中になったものだ、つくづく感じます。当たり前の日常は、実は、当たり前で無い事を思い知らされました。

今年一月に生まれた二人目の孫と会うこともできず、妻と二人で自粛生活を甘受しています。

とは申せ、近所を散歩したり、草花を植えてみたり、ささやかながら楽しんでます。

また、医療従事者の献身的な行為には、心より感謝し、頭の下がる思いで、一日も早い終息を願っています。そして、早くカーブの試合が観たい。

52年卒 河原 雅彦

私は2018年末に父親が亡くなり、長男という立場もあり、府中市の実家に帰りました。それ以降は、実家の諸事情もあり、リタイアの生活を送っております。

普段はアマチュアとしての音楽制作を行っております。と言いますのも、親の介護の関係で（5-6年行っていた）、今まで溜まっていたアイデアを具体的にCDという形で起こしております。

府中市に帰って来て良い点ですが、ある種の安心感があります。また近所の方も含めてそれまでの親の存在感で、いろいろと親切に接していただいております。

逆に厄介なことと言えば、府中市は小さな街ですので、誰かと直ぐに出くわすのです！道路を歩いていて前方に女性の方が2名いました。1名は年配の方でした。田舎ですので、顔が合えば「こんにちは」と当然挨拶をしますので、その年配の女性と顔があったので「こんにちは」と挨拶をしたところ、なんと高校の同級生でした

さて、音楽制作の話ですが、録音スタジオは福山Cableといいます。オーナーでありまたエンジニアの方は出原さんという府中高校の出身の方です。エンジニアとしての腕はばっちりです。

また不思議なことに、35年以上も東京に住んで、毎春には必ず「花粉症」に悩まされていたのですが、ここ2年はどういう訳かその心配もありません。間違いなく空気はきれいなのです！

ということで、もし事情が許されるのであれば、是非、生まれ故郷の府中市に帰られることをお勧めいたします。

53年卒 小川 由美子（柿本）

レッスン、コンサート等全て中止、延期になりましたが、来年の同窓会総会に希望を託してこの大変な時期を細心の注意で乗り越えたいと思います。

53年卒 石橋 正文

本年3月に定年を迎えましたが、雇用継続をしていただき、続けて働いております。

また、定年とともに、長年住み慣れた社宅を出て、同じ市内の中古住宅に引っ越しをしました。初めての持ち家といっても、息子が借金をして買った家に住まわせてもらっている状況ですが、そのせいなのか、息子からは生涯働きなさいと言われていています。もちろんこれといった趣味がないせいもあります。このところ定年を機に同級生と会うことが多かったのですが、コロナの影響で、一旦中止となっています。

54年卒 坪井 正博

コロナで経済とともに医療も崩壊一步手前みたいな部分があります。

幸い、私の病院は患者さん、医療従事者からコロナが出ていないので、今のところ通常診療できています。ただ、ひとり出たら診療停止、治療中の患者さんの受け入れ探し、院内感染拡大の予防等大変な事態になります。相応の緊張感をもって過ごしています。治療薬が出てくればインフルエンザ並みのケアに落ち着くことを期待しています。

54年卒 福知 薫（河面）

毎年お正月には家族みんなで府中に帰省します。私はもちろん、主人も子供たちも、私の実家が、府中が、大好きなのです。今年は長男夫婦、二男夫婦、孫も連れて総勢7人で帰省。コロナ前でラッキーでした。いつも私たちを暖かく迎えてくれる実家には感謝です。

そして、府中に帰ると二中、府中高校からの友達に会い、しゃべって笑って、楽しい時間を過ごします。いつも時間を作ってくれる友達もありがたいです。府中、府中高校、実家や友達はかけがいのないものです。これからも大切にしていきたい。また会える日を楽しみに、元気で頑張ります！

54年卒 横山 由美枝（三原）

今は専業主婦です。ホームベーカリーを買ってパンを作ったり、障子を貼り替えたり、植木をチョコチョコ切ってみたり、けっこう楽しんでます。

54年卒 豊高 実

現在、コロナ全盛の池袋に住み、職場は新宿という危険地帯の中で、元気に暮らしています。今年の3月末からは在宅勤務を始め、既に4ヶ月が経過しました。まだ一日も出社せず、会う人は全員、画面の向こう側という状況です。既に、定期券も切れ、会社への行き方すら忘れそうです

（笑）。先日、娘の嫁ぎ先との初顔合わせがあり、予定していた食事会は中止し、これもオンラインでの顔合わせとなりました。実際やってみると全く問題なくいい感じでしたね。亡くなられた方や経済的ダメージを受けた方が多い中、心が痛みます。良く言われる事ですが、これからは、本当にビジネスも生活も全く新しいものになるかもしれませんね。でも、同窓会は対面でやりたいものですね。皆様との再会の日を楽しみにしています。

55年卒 山本 典令

在宅勤務中心で運動不足の日々です。外食できないこともストレスですが、多くの店でテイクアウトできるようになったので酒代が安く済むと思って納得しています。またみなさんと会えることを楽しみにしています。

55年卒 保科 徹哉

私事、来年還暦を迎えますが「人生100年時代」をどう生きるか？最近「定年ゴジラ」（重松清）、孤舟（渡辺淳一）を読みました。身につまされる「定年間近のおじさん必読書」です。お時間、ご興味のある方は一度手に取ってみてください！

56年卒 藤井 康雄

今春、初孫に恵まれました。外出自粛規制中でも、スマホ越しで会えます。便利な世の中になったものです。抱きかかえられる楽しみは、ゆっくりと待つことにしています。

57年卒 渡邊 俊之

学校現場も、てんてこ舞いで、先が見えないながらも何とかしていこうと頑張っています。再開してからは、もっと大変であることは覚悟の上ですが。学校ばかりでなく、どこも大変であることは十分承知しています。お互いに、がんばってのりきるしかないとも思います。頑張りましょう。

58年卒 松葉 達憲

現在自分は、神奈川県平塚市立の中学校で、数学を教えております。生涯一学級担任として、教員を続けるつもりでおります。部活動はバレーボールを教えております。ぜひ、練習試合をお願いいたします。

平成2年卒 松本 真弥

コロナ禍の影響により、みなさまには窮屈な自粛生活を送られていることと存じます。他ならぬNekiも例外ではなく、4月18日から5月10日までの3週間にわたり休業を余儀なくされました。5月11日に営業再開し約2か月が経過した現在も、来客数は従来の半分にも満たない状態です。

お好み焼きはカウンター席に座り、鉄板の上で熱々を食べるのがだいこみですが、感染予防のためカウンター席は封印。また、マスクを装着し、鉄板前で調理をするのもなかなか大変なものがあります（いつもの10倍くらい汗かきます）。いましばらくは辛抱の時かと感じております。

さてNekiの休業により、図らずも3週間の休暇となったわけですが、、、ピンチはチャンス！社会人にとって3週間というまとまった休暇を採ることはめったなことではできません。休業時期は春、ちょうど樹木が芽吹く季節にあたります。実は3年ほど前に盆栽というものに魅了された私、この芽吹きが大好きなのです。芽吹きの季節は木々の植え替えの適期にあたります。

予期せぬ休業は、ゆったりと盆栽をいじり、しっかりと根っ子を見ることができる時間となりました。樹木の植え替え作業は、木の根っ子を見る絶好の機会です。根っ子が元気な木は枝や葉っぱも元気に育ちます。根っ子が元気であれば、たとえ台風で枝を折られようとも、再び新芽を伸ばし元気になることができます。人もしかり。

大変な時期ではありますが、しっかりと根を伸ばしパワーを蓄えることに努めたいと思います。

平成15年卒 岩岡 隆之

コロナの影響により一時休業になりましたが工期は変わらず、竣工の9月まで忙殺される日々になると思います。

府中高校同窓会東京支部総会に初めて参加させて頂いてから、気づけば10年の月日が流れていました。（当時は25歳）私はゼネコンの現場マンとして、狭い世界で過ごしていましたが、総会で出会った多くの大先輩に触発されて視野を広くさせてもらっています。子育て世代になる高校時代の友人とは、年に一度集まれるかどうかですが機会を絶やさぬようにしていきたいと思います。

府中の思い出、高校への想い

26年卒 宅味 大治

高校2年の春、学制が大きく変わり男女共学が始まった。夏休みに、近所の3年女子の柳島(民子?)さん他との夕涼みの縁台話しの中で、「折角共学になったことぢやし、学校で混声合唱でもやらん？」ということになった。

2学期が始まると早速、同好者集めに乗り出した。女子2年家庭科の村上武子さんに音頭を取ってもらうのが良からうということになり、2学期のある日、意を決して休憩時間に彼女のクラス(全員女子)の部屋の入口に立ち「村上武子さん居られますか？」と大きな声で呼ばわった。一瞬シーンとなる中、怪訝な表情の一人の女生徒が窓際の席を立て、近づいて来た。

……このようにして、女声20人・男声10人足らずが集まり、指揮は音楽教師の息子で1年生の鈴木君と決まった。伝統ある旧府中中学ブラスバンドと合体して、府中高校音楽部が出来た。

35年卒 小川 博靖

1957年に入学した秋に高木駅（だった？）を回って帰るマラソンでダントツのビリになった。盲腸手術をして入院と自宅療養の3週間で過ごした後の2週間目に行われた。多少の自信があり、余裕で集団の中にいたが徐々に遅れて、ついに最後尾についていた先生に励まされることになった。その上に、「先生は先に学校に帰るから」と見放されてしまった。気力だけでは無理だなと思い知ったときだった。

35年卒 小川 英光

毎年行われていた芦田川堤防のマラソン大会が印象に残っています。一年目はまじめに走りました。二年目は自作の草鞋をはいて走りました。軽くていいと思ったのですが、走り終わってみると、足は血だらけになっていました。三年目は最後なので、後は歩いてもいいから校門は一番で出ようと全力疾走しました。しかし、前を軽快に走る友人を追い越すことはできませんでした。彼は最後までそのまま走り抜きました。陸上部は偉大です。

36年卒 桑田 制三

私の「こころの風景」 NHK「日本縦断こころ旅」への応募のように

正平さんそしてチャリオ君、私の「こころの風景」は、広島県府中市出口町の稲荷神社から見る府中高校と府中の町の景色です。JR府中駅から西の山に向かって一直線の駅前通りがあります。その山の中腹にポツンと小さなお堂が見えます。そのお堂のことを何と呼んでいたか記憶していませんが、地図で調べますと「稲荷神社」です。

お稲荷さんは麓から100メートル？ほどの高さですが、府中市の中心市街地が見事に見渡せます。真下には広島県立府中高等学校のグラウンドと校舎が広がり、東に向かって柵の目状の街並みが広がり、右手には芦田川が東に向かって流れています。府中の町の最高の展望台だと思います。

故郷といえはこのお稲荷さんからの景色が思い浮かびます。府中高校の卒業アルバムにもその風景写真が掲載されています。

卒業は昭和36年（1961年）3月です。校舎は大正12年（1923年）にスタートした県立府中中学校以来のものです。風格のある屋根構えの木造2階建て、廊下はコールタールが塗られ、油臭い独特の匂いがしました。ガタピシの木製の机と椅子でしたが、階段教室もありました。グラウンドには、これまたガタピシのバックネットがあったことを思い出します。しかし講堂は立派なコンクリートの建物でした。

夏目漱石の小説に出てきそうなちょび髭丸眼鏡の校長、うっとりする様な幾何の図形を白墨で描く数学の先生、英文の黒板を竜の爪のように五本の指を曲げて叩く英語の先生、話しの最後に必ず「ノ」をつける化学の先生、自分の精子を持ってくれば顕微鏡で見せてやるといった生物の先生、思い出尽きない高校でした。

お稲荷さんへの上り道は高校のグラウンドから見て右上にあります。道は整備されたとは思いますが、正平さん、お稲荷さんのお堂の前から、府中高校の新しい校舎と府中の市街地を眺めてもらえませんか。60年前、街にはビルらしい建物はほとんどなかったと思います。現在の市街地はどのような見えるのでしょうか、ワクワクします。

38年卒 佐藤 義雄

「和田辰國先生と”英語”の思い出」

高校に入学して間もなく、当時普通科でクラス編成があった”英語”で初めてテストがあり、その結果が返ってきました。一人を除いて全員が零点か一桁台でした。その一人は満点。和田先生はこのクラスのテスト結果について”平然”と話されたことを思い出します。井の中の蛙とはこのことで、皆が受けたこのショックたるや大変なものでした。それから毎月か隔週だったか（？）、スパルタテストは続きましたが、皆、成績を上げるため必死でした。教材の試験範囲の文章だけでなく、特に脚注にでてくる熟語や常套句などの解説は全て覚えるようにしました。こうした努力の甲斐があつてか、三学期になるとクラスの平均点は90点以上になりました。ある時はほとんど全員が満点のこともありました。幸いにも、私は高校3年を通じ、和田先生のスパルタ英語についていき、お陰様で英語（会話は別）には自信を持つことができました。

38年卒 甲斐 弘己

グラウンドの上に寮があり、一年寮生活しておりました。寮長は太田先生だったと思います。いつもスリッパをペタンペタンと音をたてて歩かれるので、「ペタン」と言うアダナをつけていました。寮のお風呂がよく故障し本町の銭湯に行っていました。お風呂代15円だったと思います。又高校のプールに夜、町の怖いお兄さんたちが勝手に泳ぎにきているので寮生みんなで行くようこわごわ遠くから声を掛けたこと。オートバイのはやりの頃、夜グラウンドに練習に来る人あり、又皆で追っ払いに行った覚えがあります。昔の事です。

熱海の現況は、早く地元にも溶け込む為町内のお祭りには参加する。市役所の生涯学習で蕎麦打ち教室、マジック教室を開いて時間のあるお年寄りの方一人でも多くの方が家に引きこもりにならない様、頑張っております。皆様がいきいきと活動されている様子を嬉しく思いご指導しております。

42年卒 奥田 操

今でも思い出せることは、4つあります。

1. 勝ったことがなかった弱小の芦田中学野球部が東部地区大会で準優勝をした。そのチームの投手・私と捕手・戸田君が「甲子園に行きたい」強い思いを持って入学しました。しかし、2年の時、（後にプロ野球で活躍した）浅野啓司投手、村田兆治投手の福山電波高校との試合で惨敗、大きな力の差を感じて野球を断念しました。→挫折で目標を変える。

2. 12Kmの山道を自転車通学中にトラックと衝突した。私の体が、車の上を1回転して飛び越えたが怪我なく助かった。→奇跡の事故

＜挫折・事故を味わいましたが、少しは良い思い出もありました。＞

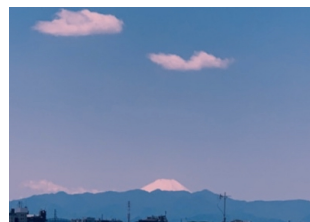
3. 2年の時、全校校内柔道大会で優勝した。

4. 3年の時、中国地区模擬試験の数学で単独トップになった。

→人生を大きく変えた3年間でした。

42年卒 川部 武郎

コロナ自粛で日々の運動不足が深刻だが、せめての日課としているのは近所での5kmほどのウォーキング、爽やかな風と軽い汗が気持ちいい。お気に入りの多摩川土手コースは遠く西方向に美しい富士が望める。そして、その方角のさらに向こうには遥かに府中高校もあるんだと、いつも懐かしい想いが飛んでいく。



すっかり衰えた足腰に呆れながらも、今日も若い頃を思い出した。入学したあの頃の校舎は全て木造で、土足のための油臭い廊下や教室風景が甦る。

新入生でワクワクしながら選んだ部活はどこかカッコ良かったバスケット部だ。遅しい上級生は有能な新人を探していたと思うが、未経験者でも歓迎してくれた。そして毎日授業が終わるとすぐに汗臭い部室で着替えて、グラウンド山側の屋外バスケットコートへ向かい、日没まで練習に没頭する日々が始まった。

最初は腹の底から大声を出すだけの訓練から始まり、すぐに声は枯れ、息が切れても切れても走り込みをさせられた。それでも数ヶ月のうちに運動できる体ができあがってきて、筋力もついてきた。ランニングシュートができる頃にはクラブ活動にすっかり夢中になったものだ。

体育館はスペース不足で屋外コートしか使えず、いつも土埃にまみれ、夏是水撒き、冬には雪掻きも欠かせなかったが、苦ではなかった。県大会予選や他校との親善試合などでは勝利の喜びより負けた悔しさの方が多かったはずだが、思い出は楽しい。

未熟な後輩を懲りずに鍛えてくれた先輩たちは厳しくも優しくかった。目を見張る様な技や能力をそなえた多くの仲間にも出会えて、新鮮な刺激を受けたものだ。友は皆個性あふれて輝いていた。山は青く、憧れの娘も輝いていたあの頃が懐かしい。

古希を超え、もちろんあの頃の体力の復活は望むべくもないが、自粛明けの新生活でも孫と元気に行動できる持続力は鍛えていこうと思うこの頃です。

44年卒 近藤 宣行（大元）

昭和41年に入学して間もなく、校舎の南側の木造小屋の一角にウエイトリフティング同好会の部室、練習場がありました。通りすがりに見学していると、3年生の小川さん（加茂中出身）に、「ここに名前を書け」、と言われて名前を書き、それが入会のきっかけでした。中学時代はブラスバンド部に所属していましたので、祖母は府中高校に入学したらオーケストラ部に入部すると思っていたのでしょうか。「宣行、重いものを上げたり下げたりして何が面白しれんにゃ」と言われたのを今も懐かしく思い出します。

45年卒 日谷 伸児

府中高校に寮があったことをご存じでしょうか？

神竜中学永渡分校（既廃校）出身の私は、府中高校での3年間を、グランドの北側高台にあった「菁莪(せいが)寮」で過ごしました。卒業して数年後には老朽化によりその長い歴史を閉じ、現在はコートか何かになっているようですね。添付の写真に写っているのが木造二階建ての男子寮で、その裏に女子寮があり、さらにその奥に鉄筋のレクリエーション用生活センターがありました。

当時、主として旧神石町、三和町、油木町など遠隔地からの生徒が、男子寮に40名前後、女子寮に20名前後で寮生活を送っており、部屋は当然ながら和室で、1部屋に4~5名ずつ1・2・3年生がそれぞれ同室になるよう部屋割りされていました。すぐ裏に女子寮があるため、窓から女子寮生が廊下を歩く姿をチラ見したものです。今時の高校生と違って純情でしたからね。

寮といえば、上級生による厳しい指導のイメージがありますが、しごきのような暴力はなく、同じ山奥のド田舎から出てきた者同士の連帯感めいたものがあって、同室の上級生にはいろいろ教えてもらったり、和気あいあいとした雰囲気でした。ただし、寮生活に慣れて気が緩んでくると、夜に全員広間に集められて正座させられ、電気を消し、上級生から説教されることはありましたが、一種の恒例儀式です。毎年春先に新しいクラスの集合写真ができると、決まって上級生から「写真見せーやー。」「この子がかわいいのー。」「いんにゃこっちの方がかわいいじゃろう。」と大騒ぎ。お陰で今でも同級生の名前は結構憶えています。

規律面でいえば、起床から食事、消灯まで時間が決められており、起床時と消灯時には宿直の先生による点呼が行われるなど、若干の不自由さはありました。10人前後の先生が交代で宿泊し、トラブル等に備えていましたが出番はほとんどなかったように思います、たぶん。勉強時間も決められていたので、宿題や復習は効率的にやる工夫をしたものです。私はバレーボール部の練習疲れから、居眠りをしては先輩からよく注意されていました。

もう時効なのでバラしますが、3年生になると消灯後に抜け出す強者も若干いたようです。誰とは言えませんが先生の中にも…。

施設面では、当時大浴場が壊れており、毎日市内の銭湯通いを強いられたものの、帰りに府中焼きを食べたりして、結構楽しみの時間でもありました。肉玉そば、最高です！

共同トイレは1階の端っこ、怪談めいた言い伝えがいくつかあり、ビビリの私にとって深夜の利用は恐怖でした。

1年のうち実家に帰省するのは、片道でも丸1日かかるため、春休み、夏休み、正月くらいだったでしょうか。休日には皆でサッカーをやったり、友人宅で遊んだり、時には福山でデートしたり、3年間という青春の中のほんの1頁、今でも懐かしい寮生活です。

【グランドから望む寮】**【部屋の様子（窓の向こうに女子寮が）**

45年卒 細川 修宏（本部同窓会 副会長）

昭和42年に田舎の中学校を卒業し、当時は近隣の市町で学生寮があるのは府中高校だけだったため両親の勧めで府中高校に進学しました。

菁莪寮に入ってから毎朝・晩、室内点呼があり、各室長が舎監の先生に異常の有無を報告していました。一年生の時は同期の誰かが規律を乱したりすると連帯責任で同期生全員が長時間正座をさせられたのを覚えています。

また毎夜、勉強熱心な先輩方が受験勉強中に夜食を用意し、室長の許しがあるまで寝ることは許されませんでした。あの頃は「先輩の命令には絶対服従」のような雰囲気です。私自身若干、胸につかえる物もありましたが、その後の社会生活を送る中でよい教訓になったと感じています。

一年生の時、校内の剣道大会があり全校の中で優勝した際、常々注意を受けてばかりの私が寮の先輩から一度だけ褒められたことは今でも忘れられません。

最近になってかつての先輩とお会いする機会があり、当時のご指導に対してお礼を申しましたら先輩は苦笑しながら「昔のことはもう言わないでくれよ」と言われ、あの時の胸のつかえがとれました。まだたくさんの思い出がありますが、またの機会にご紹介したいと思います。

46年卒 佐藤 信之

S46年卒、学年世話人を東京支部にて彼此20年以上させて頂いております佐藤信之でございます。ご縁ありまして昭和58年（1983）から此の地に居ります、丁度東京ディズニーランド開園の年でありました。高校時代は深安郡（現在福山市）の加茂中出身で毎日福塩線にて3年間クラブ活動もしない帰宅部であり通学に遠路明け暮れた学生時代でした。後藤校長・桑田校長先生の時代でした、その1年担任は英語の和田先生、2年担任国語の塚本先生、3年担任は数学の小林先生でありました。学年9クラス総勢400名の生徒数の規模でした、同期卒業生は此の関東圏に約30名と承知しております。2021年は同期の皆さん是非お出まし下さい、是非お待ちしております。

47年卒 影山 修一

私の高校時代の大切な思い出のひとつが、1年生の時の音楽部（オーケストラ）の演奏旅行です。中学（府中二中）のブラスバンドでパーカッションを担当していたことと、夏の納涼音楽祭でオーケストラの演奏を聴いて感激したことで、府中高校に合格したら音楽部に入ると決めていました。出来ればパーカッションを担当したかったのですが、楽器編成の関係でチェロを担当することになりました。元々リズム感には自信があったのですが、音階のある楽器には苦労しました。先輩のご指導を受けながら悪戦苦闘の毎日でした。

そしていよいよ演奏旅行に出発。主な演奏曲目はベートーベンの「運命」です。どの街で演奏会を行ったか記憶が曖昧ですが、NHK広島放送局で演奏した記憶があります。もしかしたら私の希望的妄想かもしれませんが・・・。

何はともあれ演奏前の緊張感と、演奏後の達成感は今でも心に残っています。

また、学校に泊まり込んでの合宿練習も忘れられない楽しい思い出です。

48年卒 井上 誠

高校時代の思い出は悪い遊びばかり。昨年急逝した親友との時効だろうと思う思い出をひとつ。

同級の宮脇君が豊松の実家で採ってきた「松茸」を放送室で焼いて食べたことがある。今より採れたとは言え部員十人ほどでも食べきれない量。あの時に食べ過ぎたのか以後あまり口に入らない。

当時の放送室は本館一階の職員室と廊下を挟んだ真向い、隣は保健室という好立地。ちょっとお借りした近所のお店の看板と電熱器で焼松茸。相当長い時間、松茸と醤油の匂いが昼の中庭に充満したはずなのに不思議に誰からも咎められた記憶がない。洗った看板は、後輩が責任をもって、そっと返しに行ったらしい。

当時のメンバーとは未だに付き合いが続く。胸は張れないけれど長閑で楽しい思い出。

50年卒 野村 祥子（福田）

写真部に属していたのですが、写真のことより、部員との外での活動が印象深いです。テニスをしたり、泊まりでの合宿、学校帰りに喫茶店に寄ったり…参加者は、先輩、後輩とも 仲良く部活動に参加し、文化祭も皆で協力して行えたと。又、放課後を楽しみにしていた記憶があります。

51年卒 佐藤 宏一

私は高校三年間軟式庭球部で汗を流しました。一年生の頃は、先輩たちの後でボール拾いと声掛け、そして厳しい練習の毎日でした。特に夏は猛暑の中、今とは違い水を飲むことも許されませんでした。そこで疲れた時に一年生同士が、わざと隣接するリョービの工場にボールを打ち込みそのボールを交代で取りに行きます。高いブロック塀で見えないのを良いことに休憩を兼ね水飲み場で喉を潤してたことが一番の良い思い出ですね。

52年卒 橘高 義治

高校時代の思い出はやはり二年生の時のカーブの初優勝でしょうか？まだ府中から広島市民球場までは遠い道のりであり、間近に観戦など出来ませんでしたが、広島県民を実感した出来事でした。また応援といえば体育祭の応援合戦も盛り上がりましたね。青田赤道の花の応援団の漫画もその当時流行っており、学園祭で“嗚呼!!花の応援団”の劇まで演じてしまいました。

東京の同窓会に参加し始めて早18年ほど経ちましたが、オーケストラ部出身の皆様の演奏会も多く催され、なんてハイソな同窓会かといつも感服しています。

思い出せば私は柔道部で、正門に入って右側の旧講堂で練習をしていたわけですが、練習の合間にふと耳を澄ませば校庭から聞こえてくる管弦楽の調べには、心を癒されたものです。

まさに高校府中にかおるや文化。

52年卒 滝口 洋子（中山）

親の転勤で府中に引越しし、府中高校へ入学したため、誰一人知り合いもなく、また備後弁もよくわからず（笑）、入学当初はかなり不安でしたが、すぐに慣れ、クラブ活動はバレエ部に所属し、楽しい3年間を送ることができました。

高校3年の時に運動会限定の応援団に入り（入らされた？）、男子の制服を借り、髪もショートカットにしたため、かなり性別不明になっていたようです。フォークダンスの時に男性側に回されました。（笑）

現在はカーブ観戦が楽しみの一つです。コロナが収束して早く応援に行きたいと思っています。

52年卒 原田 実能

山陽道死の彷徨(音楽部の仲間たちと)

私は府中高校時代のほとんどを音楽部三昧で過ごし(笑)名古屋芸術大学に進みました。ちょっと変人でしたので帰省する時は各駅停車に揺られて、乗り降りする人たちの訃りを味わい、自然の風景の移ろいを楽しむのが好きでした。

が!!ある時、こともあろうに音楽部同級生の某N氏にそそのかされて、兵庫県の西宮から府中まで歩いて帰ることに!! 12月も暮れる寒い季節で、大荷物を背負っての8日間の弥次喜多道中は、海岸で寝たり、お寺の本堂をお借りしたり、橋の下で雨宿りしたりと、スツクモンダの旅でしたが楽しい記憶となりました。たまり場だった府中駅近くの喫茶店「フランセ」をGoalとして、音楽部仲間が出迎えてくれて「山陽道死の彷徨」という名の「表笑状」を受け取りました。

その時の冒険の記憶が還暦を過ぎた今でも、見えないものにチャレンジしていく生き方に拍手をかけてくれています。

52年卒 光成 慎二

府中高校には、正式な応援団的な組織が存在して無くて、私達同級生が中心になって立ち上げた思い出があります！空手、柔道、オーケストラなどに声掛けして、私の友人の府中東高校の奴に応援のやり方習ったりして、野球部の夏の予選会で応援出来たのが懐かしい思い出ですね！高校も卒業して行ってないので、随分変わった事でしょうね！受験勉強も真面目にしなかったから、勉強した思い出は全くないけど、後輩達は頑張っているのでしょうね。

52年卒 井上恵子（上畑）

高校の思い出は学校と言うより友達でした。

3年間で 高2の時のクラスはみんな個性的で仲良く、特に楽しいものでした。信州、黒部、日光を巡った修学旅行での楽しい思い出。担当して下さったバスガイドさんが後日、福山まで私達に会いに来られました。今でも同窓会で繋がってる友達はその時のクラスメートが結構います。それだけ濃いものだったんだと思います。

53年卒 江草 稔

やはりサッカー部。1年生秋の全国高校サッカー選手権広島県大会での思い出ですね。ベスト8に入ったことです。当時私もレギュラーに入っていて（昔の名前で）右のウイングのポジションをしていました。

当時は広島県では県工（広島県立広島工業高等学校）が全盛時代で元日本代表の金田喜稔さんや木村和司さんが同世代です（金田さんが2学年、木村さんが1学年上です）。当時の県工のユニフォームに憧れたものです。その金田さんとは8～9年前にジムで見かけ、2～3か月後にやっと声をかけ、気さくに話をしてくれたのを思い出します。

話は戻り、勝てばベスト4に進む相手は広大付属高校（当時は強かったのです）、何と4対0で完敗でした。私も後半足をつり途中で交代したような苦い記憶があります。当時は二中が強く（先輩たちは県体優勝、中国大会優勝）その当時のメンバーが府中高校に進学していました。

最後までお世話になった先輩では赤毛さん、谷本さん（一中）、神野さん（芦田中）・・・その中の谷本さんは昨年他界され、さみしい限りです。

谷本さんの息子さんは皆実高校が全国大会で優勝した時の、何と背番号10番のエースですよ！また谷本さんが東京に転勤で来られた数年はよく飲みに付き合いました。ご冥福をお祈りします。しかし府中高校のサッカー部の歴史が50年を超えてきていますが、その時のベスト8がいまだに最高位だそうですよ。後輩たち、早く抜いてね。

他の思い出は、高校2年次。高校2年は通称山口組と言われ、山口先生の下、スポーツ学級として知られ、春・秋の球技大会、秋の体育祭等、山口組が活躍しました。

その中でも秋の体育祭でのトリを飾る800メートルリレー。当時（今もそう？）先生もチームを組んでやっていましたね。しかし当然3年生が一番強かったのですが・・・。決勝では第一走者森本哲也、何と6番手で帰ってきて（私に花を？これも盛り上げる作戦？）第二走者の私は、何と5人抜きで2位へ、第三走者山崎幸彦にバトンを渡し余裕で1位へ、そして当時陸上部だった第四走者の森迫へ。これがぐいぐい2位を引き離しダントツ、ぶっちぎりの優勝でした。球技でもソフトボール大会やバレーボール大会でもいいところまでいったかな？その幸彦も今は亡き人へ。さみしいですね。昔を思い出すと亡くなった同級生や先輩のことも思い出してしまいました。

しかし今は亡き友や先輩は、心に今も鮮明に残っていますよ！これらが高校の私の思い出です。

54年卒 佐藤 陽子

府中高校を卒業して、40年以上が過ぎ去りました。一番記憶に残っているのは1年のクラス。とても仲のいいクラスで、映画（8ミリビデオ？）を撮ったり、担任の先生のご実家（島）に遊びに行ったり。夏休みには、大久野島にキャンプにも行きました。今ではうさぎで有名になっていますが、当時まだ整備されていなかった毒ガス工場跡での肝試しはとても怖かった。男女ペアでの行動でしたが、怖すぎてロマンスの神様も出てきてくれませんでしたw

.....

55年卒 小野 恵美（柴床）

1979年、高校3年生の受験生だった年はカープにとって、4年ぶりの2度目のリーグ優勝と初の日本一に輝いたシーズンでした。「江夏の21球」でも知られる年です。

授業中もカープの試合が気になって仕方がない。そこで私はラジオにイヤホンを差し、セーラー服の袖を通し、頬杖をついてイヤホンが見えない状態で試合中継を聴きながら、スコアボードを後ろの友達用に書いて、知らせてました。その何回かの時、イヤホンがラジオから抜けて、実況中継が流れ出しました。

副担任だった英語の門田先生は優しく笑いながら、「みんな気になっとるけえ、状況を教えてやれ！」と。先生も生徒も一緒になってカープを応援していました。

卒業アルバムの集合写真は、賑わっていた銀天街に掲げられた「祝優勝広島東洋カープ」の横断幕の前で。先生と生徒の距離が近くて、「個」を大切にしてくれる府中高校が大好きでした。

56年卒 飯田 泰弘

「翼をください」

昭和53年4月に府中高校に入学しました。当時クラス対抗の合唱コンクールがありました。（今もあるかもしれませんが）

1年生のとき、私のクラスは「翼をください」の曲を選びました。
合唱コンクールに向けて日々練習し、クラス全員が一つになることができました。
当日はすばらしいコーラスになり、学年で優勝したと記憶しています。
あれから40年以上が経ちますが、今でもこの曲を耳にすると当時が思い出されます。

57年卒 山中 由美（北熨斗）

あの頃の自分は、後悔することばかり。気持ちと行動が一致しないことも多かったし、勉強もスポーツもパツとしない生徒だった。

でも、初めての運動会で教室に来てくださった応援団長のカッコ良かったこと。学食の野菜を極限まで微塵切りした炒飯にハマっていたこと。学校帰りのお好み焼きの美味しかったこと（ネコ舌の私は友人のペースに合わせるのが大変だったけど）。

イヤでも参加させられる球技大会、友人に付き合ってもらって近くのグラウンドで遅くまで練習したこと。遅刻常習犯の私は、時間がなくて雪なのに自転車で坂道を下り、路面が凍っていてハデに転倒したこと（自分の悲鳴が聞こえる 本当に怖かった）。些細な事が、おばさんになった今微笑ましくも思う。

あの頃、こんな私に関わってくれた友人たちに感謝の気持ちでいっぱいです。

57年卒 松浦 順子（久保田）

高校での学び～そして今

今、私は仙台に住んでおります。

府中高校を卒業後、大学進学で上京し、その後、結婚の為仙台へ移り住み4年間の中東のバーレーン赴任を含めこの地に来てもうすぐ40年が経とうとしております。

これまでの私の歩みを振り返ってみると唯一、継続していること…それが府中高校の音楽部（オーケストラ）で始めたヴィオラです。府中高校音楽部は、私の時代は知る人ぞ知る体育会系の部活と肩を並べ、朝練、昼練、放課後練、休日練に及ぶ練習漬けの毎日、また上下関係も厳しい部活で有名でした。その厳しい日々を乗り越えての演奏会を重ねていくうちに、オーケストラの何とも言えない魅力、一人一人の音が集まって一つの音楽を創り上げる醍醐味にはまってしまい大学オケ、社会人オケ、オケのなかったバーレーンでは多国籍の音楽仲間とのアンサンブル、そして、仙台にある今のオケに入団してもうすぐ30年です。

自分でも、このオケ生活をこんなに長く続けるとは夢にも思っていなかったのですが、どこに行っても、どんな時も私のそばには常に音楽がありました。

9年前の東日本大地震の際、私の住んでいるところは津波の被害は免れたものの、1か月近くもの間、水、電気、ガス、全てのライフラインがストップした生活を余儀なくされました。

戦争体験はありませんが、中学校の校庭に来る給水車の行列、食料を入手する為に家族で協力し合って何時間も並んだり、配給生活のような日々が続く、その経験から様々なことを学びました。生活していくことが精一杯の中、当時、高校生、中学生だった娘と息子も後に音大に進学しましたが、いつまでも立ち止まっていたはいけなくて…暗闇の中で弾いていたバイオリンの音色が今でも昨日のこのように鮮明に思い出されます。

このように私の半世紀は音楽と共にあったと言っても過言ではありません。

そしてその原点にあるのは、府中高校の音楽部からのスタートだと思っています。

高校に入学して間もなく偶然のように始めたオケ生活を続けていくことから、様々な人々と出会い、また多くのことを学んできました。音楽のことを主に書かせていただきましたが、同窓会で何年かぶりに会ったり、何かの機会に連絡を取り合ったりする度に、時の流れ、距離を越えてあの頃に戻って旧交を温めることが出来る多くの友、その出会い、そして多くのことを学んだ府中高校を誇りに思っております。

最後に、いつもご尽力いただいております同窓会役員の皆さまに感謝いたしますと共に同窓生の皆さまのご健康とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

58年卒 萩原 稔

私は神石高原町の出身なので、下宿生活を始めましたが、下宿先は学校から3分しか離れていなかった（ファニーというスーパーがあったと思いますが、そのすぐ前のアパートが下宿先）ため、例にもれず下宿先は溜まり場と化し、雀荘になったり昼時の食堂になったりと大変にぎやかな下宿生活を過ごしていました。この下宿先に立ち寄っていた皆さんと今も仲良くさせて頂いて

いるのは本当に嬉しいです。今年2月に帰省した際、下宿先の前を通ったのですが、何と建物はそのまま残っていたので感動しました。写真も撮りましたよ。

60年卒 尾間 えみ（三船）

当時、自宅から府中高校はわずか2分。ベランダから広いグラウンドやテニスコートを見おろせる贅沢なところでした。先輩方のテニスボールの乱打、野球部のバッティング、音楽部の管弦楽器の音出し……。子どもの頃から活気ある音や声を聞いて育ち、文化祭に何度足を運んだことでしょう。長年憧れていた府中高校にご縁があり幸せ者です。

陸上部時代、スパイクでザクザク走っていた感覚も足裏が記憶しています。甘南備神社では皆で階段を何往復も。今も坂道を見れば走り出したくなるのはそのせいでしょうか？

文化祭ではクラス皆で紙を貼りあわせ大気球を作り、下からガスバーナー熱で膨らみ、井内先生のかげ声で手を離すと、ぐんぐん空高く上がっていった感動は忘れられません。たしか備後版記事に載ったと思います。

優しい仲間、先輩方、山々からそっと吹いてくる風を感じていた穏やかな高校時代でした。

スマホがなくてもちっとも不便と思わなかったし、会話が途切れたって通じ合っていた信頼感は何ものにもかえがたいです。同窓会の絆をずっと大事にしていきたいです。

60年卒 河田 克也

高校の3年間は陸上部の練習に明け暮れた毎日でした。夏場は1周300メートルのトラックを数分の休憩をはさみながら周回するインターバル走。野球のバックネットの裏は円弧ではなく角張ったコースとなっており、走りにくかったことを覚えています。また冬場は体力強化のために出口川沿いに在る甘南備神社の裏道の坂道を何回も登っていました。50才を過ぎて体力も落ちてきましたが、今でもまだ元気に動けるのはあの頃の鍛錬のおかげだと思っています。

60年卒 麻生 三奈（延岡）

昭和57年。高校入学と同時に下宿生活がスタート。散髪屋さんの2階とその裏のアパートに4～5人で共同生活をしていました。食事付きとはいえ、食器洗いには井戸水を使い、お風呂は薪で焚き、散髪屋さんの後片付けも手伝い…と、いつの時代の話？と思う程、今と比べるととても不便な生活でしたが、皆と夜中までおしゃべりをして、本当に楽しい毎日でした。

学校生活はというと、なぜか勉強のことは一切思い出せませんが、文化祭や体育祭の前には、お友達のお家に泊まり込みで準備をしたり、ただただ楽しんでいました。

卒業後、疎遠になっていた同級生とも数年前に再び繋がり、東京支部のLINEグループもできて、たまに会えるのが今の楽しみです。

63年卒 樋口 誠

合格発表を見に行き、番号を確認すると、その足で音楽室に行き音楽部へ入部を志願しました。中学からの夢を実現した瞬間でした。その後は文字通り音楽一色の生活で、音楽室に入り浸り3年間を過ごしました。年に一度の集大成である納涼音楽会は、お客様と歴代のOB・OGが集う大総会コンサートで、あの雰囲気は今でも忘れることができません。あれから30数年、演奏を生業とし続けてこれたのは本当に幸運なことだと実感しています。

現在、感染拡大防止のため、世界中のコンサートが中止や延期を余儀なくされ、納涼音楽会も中止となってしまいました。特に3年生にとって高校生活最後の納涼ができないのは、本当に辛く悲しくやり場のない気持ちでしょう。なんとかして演奏する喜びを体験させてあげることができないだろうかと思案しています。

平成2年卒 信岡 保久

昭和の最後を過ごした府中高校での陸上部で、1年生の時に寂しい出来事があり上級生の方々がみなさん辞められてしまいました。

冬の駅伝県予選には、短距離やフィールド選手全員でチームを編成して出場しまして、確かブービーでした。

平成3年卒 田辺 智也

高校最後の文化祭は非常に思い出に残った行事でした。クラスの出し物として当時流行っていた「ちびまる子ちゃん」、を題材にオリジナルストーリーとして公演しました（私はまる子の父「ひろし」を演じました）。劇中はドリフのようなドタバタ劇となり会場は爆笑の渦に包まれ、今でも楽しい思い出として心に残っています。趣味はボードゲームで誰か一緒に遊びましょう

平成4年卒 亀田めぐみ（河平） 広島支部

私の府中高校での思い出は、たくさんあるのですが、、3年生の時に、初めて、体育祭の応援団に入り、受験勉強そっちのけで、練習した日々がとても楽しかったことです。

憧れの学ランを着ました。

近況報告としては、今年度、同級生の岡村君が府中高校PTA会長になったことかな。

同級生の同窓会ライングループがあり、連絡がありました。ステキなことだなと思います。

平成7年卒 風間 恵子（小川）

「朝起きて、今日は行くのいやだなんて思ったら、逆の電車に乗っちゃえばいいんだよ」と話してくれた部活の先生が、今年府中高校を最後に定年退職されました。コロナで会いに行けなくて残念でした。最近の私はネットフリックスで寅さんを観るのにハマっています。

平成11年卒 藤本 裕二

高校生活は通学との戦いでした。福山市芦田町と府中市の間には山があり、府中松永線（県道48号）でひと山越える片道7キロの距離を自転車通っていました。今でも帰省の際は車で通りますが、自分が本当に通学できていたのか信じられません（笑）。

ただ遅刻した記憶はないので、もしかすると時間厳守の性格は高校時代に培われたのかと思うとともに、電車や車による移動が基本となり体重が右肩上がりの自分には、ダイエット目的で当時の生活に戻るのも一計かと思案するのでした。

訃 報

謹んでお悔やみ申し上げます。

19年卒 吉田 耕三様

37年卒 山崎 重人様

53年卒 牛腸 信子様

（旧姓 寺岡）

57年卒 清水 秀記様

東京支部幹事について

今年4月、会計幹事に昭和56年卒の飯田泰弘さんが新任されました。

当番幹事 総会運営部会の皆さまへ

世界を大きく震かんとせ、未だに人々の足を止めている新型コロナウィルスですが、人類の英知により必ずや克服できる日が来ます。この未曾有の事態に、準備の延期、会場である学士会館との折衝、アトラクション出演者や来賓各所への連絡案内等、主幹事として昭和61年卒の幹事団の皆さまには、本当にご苦勞をおかけしております。総会運営部会と共にどうか引き続きよろしくお願い致します。令和4年には、どうか皆さまお元気でお目にかかれそうですように。



恩師ならびに卒業生の作品寄贈

東京支部では、本部同窓会からのご援助をいただき、学校図書館への寄贈活動を続けております。東京支部会員に限らず、全ての同窓生・恩師の作品について、情報がございましたら、総務担当幹事（小田 昌一 50年卒）までご連絡ください。090-2759-0116
sodasoda005@gmail.com

今年度（令和2年9月末 図書館寄贈済み）の寄贈品一覧

- 1 29年卒 澁谷 道尚様 「日本アルペンラリーの足跡」 全18戦とその後の展開
- 2 35年卒 小川 英光様 「擬似双直交性理論」
- 3 37年卒 高杉 玲子様 現代演劇 Vol.22 特集「ローレンス・オリヴィエ賞」
- 4 50年卒 横藤田 誠様 「精神障害と人権」
- 5 52年卒 河原 雅彦様 「We Don't Belong Here」 (CD)、 「プカプカの歌詞について」 (CD)

広島県府中市アンテナショップNEKIは元気に営業中です。物販も府中に限らず、いろいろな話題の品を揃えております。銀座のTAUでは入手が難しい「はっさく大福」がここなら、並ばずに購入できます！！。

府中焼きを食べながらの少人数でのミニ同期会や、ご旅行の打合せ、同好会の打合せなどに、是非ご利用ください。



編集後記

総会・懇親会が中止となり、ネタに困って、高校時代の思い出を皆さんにお願いしたところ、予想外の大量の寄稿で紙面にまとめるのに苦労しましたが、出費も抑えつつ苦肉の16ページ構成となりました。文字が多くて読み辛いかもかもしれませんが、読みやすい所からご覧ください。同じ時期、同じ部活、同じ寮生活、下宿生活、皆さま各々の思い出もきっとよみがえることでしょう。

編集部 矢倉（52年卒）、加藤（58年卒）、
今田（60年卒）

◆送り主◆編集・発行責任者

府中高校同窓会東京支部 名簿・広報担当 副幹事長
長谷川陽一（57年卒 33回生）
〒112-0011 東京都文京区千石2-44-16
TEL: 080-4001-8024 FAX: 03-5395-0644
メールアドレス: yo_hase@mac.com (yoの後にアンダーバーが入ります)
東京支部HP: <http://www.hiroshima-fuchu-h-tokyo.com>